

大博物館 だまの

No.52

2006.10

津山郷土博物館



寺領寄進状 正應4年(1291)6月 万福寺蔵

縦30.5cm、横44cm。津山市東田辺、真言宗黒沢山万福寺に伝わる古文書で、現在は本館に寄託されている。花押がすえられるのみで、差出者が明示されないが、鎌倉幕府執権で美作国守護である北条貞時と考えられる。蒙古襲来に備えて、正應4年2月3日鎌倉幕府が全国の寺社に異国降伏祈禱を命じた。本文書はその一環として万福寺が行った祈禱への報費として、北条貞時が寺領を寄進したものであろう。ただし、花押がきわめてぎこちな

く、北条貞時のそれとは全く異なることなどから、本文書は原本ではなく、おそらく戦国時代～江戸時代初期に作成された写本と推定される。しかし、その内容が正應4年の情勢とよく合致していること、当寺使用された特殊な暦法が用いられていることなどから、決して後世の偽文書ではないと考える。よって、本文書は写本ながら、鎌倉時代後期の史料として、歴史的価値の高い文書といえよう。

1

ここでとりあげようとするのは、真言宗黒沢山万福寺に伝来する一通の古文書である。万福寺は津山市東田辺、標高659mの黒沢山山頂直下に位置する山岳寺院である。虚空蔵菩薩を本尊とする。『作陽誌』によれば、伊勢朝熊、陸奥柳井津とともに、日本三福地(天上界)といわれる。また、和銅7年(714)の開基で、建久年間源頼朝によって復興、幕府の祈願所とされたという。これらの伝承は史料的には確認できないが、裏山にある経塚から経筒とその外容器(陶器)が出土しているので、遅くとも鎌倉時代には存在していたことは確実である。

その万福寺に伝わる古文書とは、鎌倉時代後期の正応4年(1291)6月関東の祈禱料として、某が万福寺に寺領を寄進した内容で、美作地方に所在する古文書としては最古の年代のものである。古くは『作陽誌』『美作古簡集注解』などに取り上げられているが、戦後では、『鎌倉遺文』に『作陽誌』からの引用として所載するのみで、その内容も含めて、ほとんど検討されることがなかった。これは後に述べるように、本文書が鎌倉時代の原本ではなく、史料としての信頼性に欠けるとみなされてきたことによる。しかし、筆者は本文書が後世の写本であることは事実としても、正応4年のものとして形式および内容に何ら問題はなく、鎌倉時代の史料として充分利用にたえるものとする。以下、その根拠を述べてみたい。

2

まず、本文書の用紙は縦30.5cm、横44cmの堅紙である。もと巻子に装丁されていたが、今は糊がはがれて枚葉の状態となっている。また、料紙の中程を左右に帯状に水をかぶっており、三文字が欠損している。その釈文は次のとおりである。

黒澤山萬福寺

寄進寺領事

四至 限東小□□ 限南笛田

限西土無 限北横手

右、寄進志者、依虚空蔵菩薩殿重殊勝座、奉為関東御祈禱、四至□内、除諸公事、任先例、奉為寄進之上者、於以後、彼寺領等、致違乱煩之輩、堅可處罪科者也、依寄進状之趣如件、

正應<二>年<大歳辛卯>六月 日 (花押)

(<)は割書を表す。以下同じ)

本文書は元禄4年(1691)成立の『作陽誌』(第1巻・苫南郡寺院条)に「北条家旧券」として引用されている。今、同書によって欠損文字を補いつつ、訓読文を示せば次のとおりである(ただし、現刊本は誤字・脱字が多いので注意を要する)。

黒沢山万福寺

寄進す、寺領の事

四至 東を限る、小松原。南を限る、笛田。西を限る、土無。北を限る、横手。

右、寄進の志は、虚空蔵菩薩の殿重殊勝の座に依り、関東御祈禱の奉為なり。四至の内、諸の御公事を除き、先例に任せて、寄進を奉るの上は、以後に於いて、彼の寺領等に、違乱の煩を致すの輩は、堅く罪科に処すべき者なり。仍って、寄進状の趣、件の如し。

正応四年大歳辛卯六月日

3

次に、本文書の内容を検討しよう。充所は冒頭に黒沢山万福寺とあって明瞭であるが、差出者については花押が記されるのみで、直接には明示されていない。しかしながら、差出者は『美作古簡集注解』巻14の考定のごとく、鎌倉幕府執権北条貞時とみてよい。同書ではその根拠が示されていないので、筆者なりに敷衍すれば次のとおりである。

まず、本文書が日下に花押を据えるのみの非常に尊大な書式をとっていることから、差出者は相当に高い身分の者と判断される。また、寺領寄進の目的が「関東御祈禱」とされているので、差出者が鎌倉幕府の関係者とみられる。さらには、違乱の輩には罪科に処すとあるので、正当な警察権の保持者であることが判明する。このような条件をみたす人物としては、美作国守護が最もふさわしい。

ところで、正応4年当時の美作守護を特定する直接の史料はないが、正応5年10月5日関東御教書案(東寺百合文書リ、『鎌倉遺文』第23巻18026号)により、正応5年(1292)時点の美作守護が鎌倉幕府執権北条貞時であることが確認される。また、弘安6年12月28日駿河守某奉書案(東寺百合文書な、『鎌倉遺文』第18巻13815号)によって、弘安6年(1283)に北条時宗が美作守護であったことがわかる。その間の史料を欠くが、おそらく弘安7年(1284)の時宗の死に

より、その子貞時が執権とともに美作守護も継承したと推定してよいだろう。よって、正応4年の美作守護は北条貞時であり、ひいては本文書の差出者も貞時とみてよい。

以上によって、本文書の差出者が明らかとなったが、次に寺領寄進の目的である「関東御祈禱」を検討しよう。それは当寺鎌倉幕府が全国の寺社に命じた蒙古降伏祈禱と考えるのが自然であろう。蒙古襲来については、まず、文永11年(1274)10月、元(蒙古)軍が2万7千人の兵力で、対馬・壱岐を蹂躪し、ついに筑前に上陸した。ところが、同月20日元軍が夜に入って船に引きあげたところ、暴風がおこり遭難し撤退した(文永の役)。次いで、弘安4年(1281)7月、同じく元軍が14万人の兵力でもって、博多湾に来襲してきたところ、日本軍はその上陸を阻止した。潤7月1日またもや暴風雨起こり元軍は撤退した(弘安の役)。その後幕府は三回目の来襲に備えて、博多湾岸一帯に石塁を築いて防備を嚴重にするとともに、九州の御家人を中心に交替で警固させた。これは幕府滅亡までつづいた。幕府はまたこれらの防衛措置に加えて、国内の寺社に対して、異国降伏祈禱を指令した。その初見は文永の役の翌年の建治元年(1275)であるが、その後、弘安6年(1283)、同7年(1284)、正応2年(1289)、同4年(1291)と相次いで実施したことが史料から確認できる。このうち、正応4年の祈禱は、正応4年(1291)2月3日関東御教書案(長門一宮住吉神社文書、『鎌倉遺文』第23巻17533号)によると、幕府は周防・長門両国守護北条実政に対して、両国の国分寺・一宮と主な寺社に異国降伏の祈禱を実施するよう命じている。他にも、大和、摂津、常陸、豊後、薩摩にも同様の指令がだされたことが確認されるので、このときの指令は全国を対象としていたとみてよい。

このように、鎌倉幕府による正応4年2月3日の異国降伏祈禱は全国の寺社に指令されたと考えられるので、美作においては、一宮・国分寺とともに、万福寺もその対象となったと推定される。よって本文書は同年6月幕府執権で美作守護でもあった北条貞時がその祈禱への報賽として、万福寺に寺領を寄進したものと考えられる。

4

以上の検討により、本文書の内容が明らかとなったと思う。しかし、冒頭ふれたように本文書が原本でないこともまた明白である。なぜなら、花押がきわめてぎこちなく、かつ今日知られている北条貞時のもの

と全く異なっていることである。また、墨痕からみて本文と花押は同筆と考えられるが、原本であれば通常このようなことは起こりえないからである。文書の作成年代は『作陽誌』に引用されていることから、元禄4年(1691)以前であることは確実である。おそらく、戦国時代から江戸時代初期であろう。

しかしながら、本文書はその時代に作られた疑文書ではありえないと考える。なぜなら、第一に文書の内容が正応4年当寺の情勢とよく合致していることである。後世の偽文書作成者が鎌倉幕府の異国降伏祈禱指令の詳細を知るのは困難だからである。第二に、本文書に特異な年代標記がなされていることである。すなわち、年代を「正応〈二二〉年〈大歳辛卯〉六月日」としている。大歳(太歳)とは、木星の異称で、木星が12年の周期で巡行するので、12支の運行と密着して考えられた。このような太歳干支は中国で使用されたが、日本では『日本書紀』などにみえるのみで、ほとんど使用されない暦法である。

ところが、鎌倉時代には少数ながら太歳干支が使用されているのである。例えば、正応4年8月15日坂上国長起請文に「正応二二年〈大才辛卯〉八月十五日」(金沢文庫所蔵十不二門持要抄序私見聞裏文書、『鎌倉遺文』23巻17659号)、永仁元年(1293)亀山天皇南禅寺梁碑銘に「永仁元年太歳癸巳十一月日」(南禅寺記、同24巻18411号)、永仁2年(1294)6月15日定聖願文に「永仁二年〈大歳甲午〉六月十五日」(相模宝金剛寺文書、同18670号)などとある。もし、本文書が後世の偽文書であるなら、このような特異な用字を使用することはありえないと考える。第三に、本文書は花押があるのみで、差出者を明示しない書式をとっていることである。当時の人にとっては、花押のみで差出者が北条貞時であることは明瞭であったが、後世の人にはそれを特定することは困難である。このような文書は偽文書としての効果が薄いのではなかろうか。

以上のうち、第三の根拠はやや消極的であるが、とりわけ第一、第二の根拠によって、本文書が後世の偽文書ではないことが明白となったかと思う。ただし、「依虚空菩薩殿重殊勝座、奉為関東御祈禱」のように、文章の続き具合に不自然なところがあるので、若干の誤字・脱字がある可能性がある。このように、本文書は鎌倉時代後期文書の写本として信頼性が高く、歴史的意義のある史料と考えるのである。

(湊 哲夫)



夏休み

子供歴史教室

実施しました!

弥生土器をつくる

★この教室は、弥生時代の土器を復元しながら、弥生時代の技術や生活を学習する内容になっています。小学5・6年生19名が、7月21日(金)・8月11日(金)の2日間で、土器作りと野焼きを体験しました。次に子供たちの感想文の一部を紹介します。



土器作り風景 (7月21日)

★土器を作った昔の人は、苦労して一生けん命作っていたんだなあと思った。土器作りは、ねん土をひも状にして、つなぎ目をくっつけるところがむずかしかったです。土器を焼く時、土器がすみみたいに真っ黒になったと思ったら、今度は赤くなったのでびっくりしました。なんで色が変化するのかなあと不思議に思いました。土器がわるのかとしん配したけど、わねなくてほっとしました。昔の人はこんなに苦労して、作っていたと思うとすごいなあと思いました。また作ってみたいです。
(河辺小5年 荒田弥生さん)

★むずかしそうだったけど、やってみると思ったよりかんたんでした。ガタガタになったけど、水で直しました。はちと土笛を作りました。土笛を作る時、何回も失敗しました。やめようかと思ったけどできました。その時はうれしかったです。外で、かわかした土器を焼きました。焼けるか焼けないか心配でした。土器は夏休みの工作の宿題にだそうと思っています。
(南小5年 牧尚人君)

★友達にさそわれて来てみた。最初はなんかうまくできそうになかったけど、始めてみるとかんたんだった。図工はあまり得意ではないけど、だんだん良い形になってきた。そのままやっていると、だんだんバランスが悪くなってきた。ちょっと形がくずれてきてかたほうによって、くにくにゃのつぼになった。それで、大丈夫かな?とっていたけど、仕方なく焼いた。焼いている間、われたりしないかなと思っていた。実さいに焼き終わった。どきどきしながら見に行ったら、われてはいなかった。でも形があまり良くなかった。来年も来て、きれいなものを作りたい。
(鶴山小5年 森田真陽君)

★7月21日にねんどで土器を作りました。最初、どんな形の土器を作ろうかと迷いましたが、ぼくはつぼを作りました。土器を作る時に一番むずかしかったのが、つぎめです。ねんどが少しあまっていたので土笛を作りました。そして8月11日に土器を焼きました。外でやったのでとてもあつかったです。ぼくの土器は底がぬけていたので、カメラをとる人にインタビューされました。ちょっとはむずかしかったです。土笛はうまくできていたので、とてもうれしかったです。土器作りはとてもむずかしかったけど楽しかったです。でもつぼの底がぬけていたのが残念です。
(弥生小6年 田淵健太郎君)

★土器を作る時に、くねくねのねん土を作るのに苦労した。上の方に行けば行くほど長くしないといけないから、長かったり、短かったりして何度も作り直した。あと、積んでいくとひびわれている所があったから水で直してきれいな土器にしました。そして、土器を焼くので館長について行って燃やしました。燃やすとき大学のお兄さんも来ていました。火をつけようすると雨がふりだしました。土器がぬれたらいけないからシートをかけた。そして、出来上がったから持ち帰った。
(北小6年 土井拓也君)

★土器をつくる時、ひび割れなどにきをつけてつくった。つぼは、くぼませる部分が特にむずかしかった。土器を焼くときに、たくさんのまきを積み重ねてマッチで火をつけました。火はすごい勢いで広がりました。その周りに土器をならべて焼きました。館長が火ばしで火の中に入れていました。最初は、土器が黒色になり、その後、赤色になりました。ぼくの土器も赤色になったので館長が取りました。つぼの中では木材が燃えていました。うまくできてよかったです。
(北小6年 高井善弘君)

★去年も来たことがあり、そのときも思ったけど土器を焼くのは暑い。最初は暑くなかったので土器がどういふふう焼けるか見ていたが、火がだんだん強くなるにつれて、見ているのが大変になってきた。土器の方も、色が茶色だったのが黒に変わっていた。土器を動かしたりするおじさんたちは汗をだらだら流して大変だと思った。暑かったけど見たりしていると楽しかった。土器は最後には、茶色に赤がまざった色になっていた。
(北小6年 西嶋彬史君)

★土器を作るのは思ったよりかんたんだった。ねん土でわかを作り、それを積み重ねていくのだ。ひび割れがないように少しずつ直していく作業もした。細かい作業でとても大変だった。また、焼く時は、夏でもあるし、火に2mぐらい近づくと暑くて自分が燃えそうになった。昔の人はよくこんな暑さの中で何万個という土器を作れたなあと思った。とても楽しかった。
(北小6年 西嶋晃太郎君)

博物館 入館案内

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料 一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料

※()は30人以上の団体

博物館だより No.52 平成18年10月1日
編集・発行/津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@tv.tn.ne.jp
印刷/(有)弘文社